

はじめに

宮脇 千絵(南山大学人類学研究所・准教授／第一種研究所員)

本ブックレットは、2019年12月21日に開催された南山大学人類学研究所第1回公開シンポジウム「人類学と博物館—民族誌資料をどう研究するのか?」の講演録である。このシンポジウムは、人類学研究所設立70周年記念事業として、人類学博物館とともに企画したものである。

南山大学には、人類学研究所と人類学博物館がある。これらはよく、同じ施設だと混同される。しかしそれもあながち間違いではなく、もともとルーツを同じくするのである。

南山大学が創立された1949年、人類学・民族学研究所とその資料陳列室が開設された。人類学・民族学研究所は1954年に人類学研究所と名称を改めた。資料陳列室は、1979年に人類学研究所から独立し、人理学博物館となった。2019年は、両組織の設立70周年に当たる。それを記念し、再びタッグを組み、企画したのが本シンポジウムである。

シンポジウムの概要およびプログラムは次のとおりである。

人類学研究所設立70周年記念事業関連

第1回公開シンポジウム「人類学と博物館—民族誌資料をどう研究するのか?」

日時:2019年12月21日(土)、13:30~18:00(開場13:00)

会場:南山大学R棟・R49教室

主催:南山大学人類学研究所

13:30 「挨拶」 後藤明(南山大学人文学部・教授／人類学研究所・第二種研究所員)

13:35 「趣旨説明」 宮脇千絵(南山大学人類学研究所・第一種研究所員／准教授)

13:45 基調講演「人類学と博物館—これまでとこれから」 吉田憲司(国立民族学博物館・館長)

14:30 休憩

- 14:40 報告1「物質文化研究の視点から」 後藤明(南山大学人文学部・教授／人類学研究所・第二種研究所員)
- 15:00 報告2「民具研究の視点から」 久保禎子(一宮市尾西歴史民俗資料館・学芸員)
- 15:20 報告3「考古学の視点から」 黒沢浩(南山大学人文学部・教授)
- 15:45 人類学博物館見学
- 16:30 総合討論(司会:黒沢浩)
- 18:00 終了
- (総合司会:宮脇千絵)

吉田憲司氏からは基調講演として、オリンピックと博物館、無形文化遺産と博物館、そして人類学におけるモノへの回帰とアートへの接近についてお話いただき、フォーラムとしてのミュージアムの可能性について示唆していただいた。それをふまえ後藤明氏からは、沖縄海洋博公園の海洋文化館にあるオセアニアのカヌーのさまざまな来歴および活用のされ方を紹介いただいた。続く久保禎子氏は、考古学の学びからの民俗資料の扱い方、地域に根差した博物館活動についてお話いただいた。黒沢浩氏は、モノとモノの関係に着目してきた考古学の視点から、モノと人の関係に着目する人類学との関係などから博物館展示における考古学の可能性についてお話いただいた。

その後、参加者みなで人類学博物館の見学をおこなった。総合討論では、特に「文化が担い手」が重視される昨今、博物館においてモノを介した人と人の関係がどのように結ばれるのか、有形のモノとそこに付随する無形の情報の重要性などが議論され、国際的な発信力を持つ施設も地域に根差した施設も、そこに関わるわたしたちもともに新たなミュージアムのかたちを創造する担い手となり得る可能性が示唆された。

当日は約140名の方にお集まりいただいた。アンケートでは「フォーラムとしての博物館についての講演がとても興味深かった」、「地域の小さな博物館の存在意義を再確認した」といったコメントもあり、関心の高さをうかがうこともできた。

なお、本シンポジウムはもともと2019年7月27日(土)に開催予定であったが、台風6号接近のため延期となっていた。無事開催されたことに、改めて関係各氏に感謝申し上げます。